

スイカズラ

牧 幸 男

初夏、私はこの言葉が好きである。理由を問われても答えようがない。その頃の気候が、
光り輝く新緑が目を楽しませてくれるのと、爽やかな風が頬を通り過ぎる感じが好きなの
かもしれない。この頃の季節を表した水原秋櫻子の句に

初夏の 山立めぐり 四方に風



がある。通勤時、汗ばむこともなく、一年で一番過し易い季節だろう。野にも山にも多くの植物の花が咲き乱れるようになる。スイカズラも緑一色から、葉の間に白や黄色の花が目立つようになる。

スイカズラは、我が国全土、朝鮮半島、中国に分布するスイカズラ科の常緑の木本で、いたるところで目にすることができる。茎には若い時細かい腺毛があり、基部は木性であるが、蔓となって他の植物に絡みつく。この蔓は右旋で長く伸び、葉は対生し、葉柄を含めて長さ3～7cm、幅1～3cmで、冬の間も枯れることはない。初夏に葉腋に甘い香りがする花が二個並んで咲き、しばしば枝先で花穂状になる。花は、咲き始めは白色又は淡紅色であるが、のちに黄色に変わってしおれる。そのため、一つの枝に白い花と黄色い花が同居することも珍しくない。果実は径5～7mmの液果で9～12月に黒熟する。類似の植物は約180種あり、日本には20種程生育し、多くは低木の姿を呈している。欧米では変わった美しさから観賞用に栽培されることが多い。ホテルの庭などを散歩していると、よく目にすることができる。しかし、繁殖力が強いので、野生化して困るという声も聞く。

我が国では古くから知られていた植物で、深根輔^{わみょう}二が著したわが国最古の本草書『本草和名』(901～923)や、貝原益軒著『大和本草』(1703)、寺島良安著『和漢三才図説』(1712)等多くの書物に取り上げられている身近な薬用植物である。

日本国内で最古の神社のひとつとされている、酒造りの神として知られる桜井市の大神神社^{さくらい}の鎮花祭(薬まつり)では、スイカズラと百合根を供える儀式が続いている。そして、三輪山のスイカズラと撰社^{さいじんじゃ}である狭井神社^{すいかづら}のご神水で作られた忍冬酒^{すいかづら}が配られる。このようにスイカズラは神様とも関係が深いことが分かる。その理由は定かではないが『古事記』(712)や『日本書紀』(720)の記述によれば、太陽神である天照大神^{あましてらすおがみ}が岩戸^{あめのうずめのみこと}に隠れた時、天宇受賣命^{あめつうり}が岩戸の前に桶を伏せて踏み鳴らし、神憑り^{かみがかり}して胸をさらけ出

し、裳の紐を陰部までおし下げて踊った。すると天照大神は顔をのぞかせたとある。この時の裳の紐がスイカズラ（一説にはヒガゲノカズラ）と言われて、神との結び付きがあった。

古くから私達との結びつきがあるが、詩歌に詠われるようになるのは比較的新しい。

ふるさとの きみ かきね にん 君が垣根の 忍冬の 風を忘れて 年七つ経ぬ 石川啄木

蚊の声す 忍冬の花 散るたびに 与謝蕪村



植物名は「この花中に蜜があり、これを吸う時の唇の形に花冠が似ているのでこの名が生まれた。」と牧野富太

郎博士は述べている。漢名は、冬もしおれず緑を保つので「忍冬」、花の色は咲き始めが白で黄色に変わるので「金銀花」の両者が使われ

る。別名は身近で利用されていた植物だけに多く、すいすいかずら にんどう か 金銀葛、吸吸葛、忍冬花、双花、忍冬藤、蜜桶藤、花蔓等がある。いずれも植物形態

や花の咲く姿が由来である。学名は *Lonicera japonica* で、属名はドイツの16世紀の数学者で採取家でもあった Adam Lonitzer の名を

ラテン語化した *Lonicera* からでた名、種小名は日本に産するである。

薬用は、主に民間療法であるが、『名医別録』（1～3世紀頃編纂）の上品に記載されている古い生薬である。陶弘景（456～536）

は「處々にある。藤生のもので、冬を凌いでしぼ凋まぬところから忍冬と名づけたのである。」と述べている。日本薬局方に記載され、生薬名

は蕾を「金銀花」、茎葉を「忍冬」と呼び、ともに利尿や抗菌、解熱、解毒、発熱等に使う。花を薬用酒にすると、淡黄色の忍冬酒となり、

膀胱炎、腎臓病、各種の皮膚病、強壮、強精にも効果があるとされている。特に、浴用剤では腰痛や痔の痛み、湿疹、あせも等に効果があ

る。スイカズラが民間薬として広く使われるようになったのは、①日本国中どこでも野生化していること、②身近なところで入手可能なこ

と、③丈夫で何処に植えても活着すること、④四季を通じて葉が枯れず、採取可能なこと等が理由である。

食用には、新芽や若葉は山菜として軽く茹でたあと水にさらし、お浸しや和え物、油炒め等に、葉を日陰で3～4日ほど陰干した葉

を、乾煎りしてお茶がわりにもできる。花は、そのまま酢の物にする。また、古くは花を口にくわえて甘い蜜を吸うことが行なわれたと

言われる、砂糖が入手困難の頃の日本では、砂糖の代用に使っていたとの記述がある。スイカズラ類の英名は Honeysuckle と呼ばれるのは

それに因む名称で、洋の東西を問わずスイカズラやその近縁の植物の花を口にくわえて蜜を吸うことが行われていたようである。

花言葉は「愛の絆」「献身的な愛」である。